

ふたごの役割分担

この連載の原稿を準備している間に印象的な出来事が二つありました。一つはふたごの漫画家のお一人である山根赤鬼さんの訃報で、もう一つは、若いふたごのアーティストである宮本兄弟からのお手紙でした。

赤鬼さんは同じく漫画家である山根青鬼さんの弟さんで、お二人とも「のらくろ」で有名な田河水泡のお弟子さんでした（青鬼、赤鬼というペンネームはなんとユニークなことでしょう！）。一方、宮本さんはお二人とも美術大学を出られて、現在伊勢とフランスで研鑽をつみながらそれぞれ作品を製作・発表されておられます。この夏、東京でふたごを主題としたデュオ展をされるということで案内を頂いたわけです。

さて、山根さんも宮本さんも、漫画と美術という目指す方向が違っていますが、絵という表現形態においては似通った媒体を使っています（単なる印象なのですが、文学や音楽よりも造形芸術関係にふたごのアーティストが多いような気がします。たとえば、写真界でも土田ヒロミや伊奈英次がいます）。そして、なによりも注目すべきはこの二組のご兄弟ともそれぞれが言わば同じ分野で活躍しているということです。ところが、ふたごの中には、対偶者とはなるべく同じ分野を、それはたとえば仕事の種類ということもあれば、勉強や学校・大学の分野ということですが、あまり選択したくないという考え方も強くあるように思います。僕などはこうした感覚に近かったと思います。でも逆に、同じような分野を選択し、おたがいに切磋琢磨しながら、おたがいに刺激し合いながら、活躍しているふたごの仲間が大勢いることも事実です。当然ながら世間的には、こうした同じ分野で活躍するふたごの方が目立つせいか、有名になりがちです。スポーツ界においては、古くは僕の尊敬する宋兄弟、ノルディック複合スキーマの荻原兄弟や野球の亀山兄弟、サッカーの佐藤勇人・佐藤寿人などが有名です。また、芸能界では、こちらの歳がばれてしまいましたが、大昔ザ・ピーナッツやこまどり姉妹が一世を風靡しましたし、おすぎとピーコが元気に辛口の批評を続けています。最近ではアンパンマンのドリーミングや茉奈・佳奈、フリップ・フラップがお茶の間の人気を得ましたし、外国でもアンディ&ディヴやオルソン姉妹（「フルハウス」「ふたりはふたご」「ふたりはお年ごろ」に出演）などのふたごが活躍しています。そして、宮本さんたちと同業のふたごとして、映像系ではブラザーズ・クエイや田島征彦・田島征三兄弟などの名が挙げられるでしょう。

住む環境や資質が似ている（二卵性は兄弟姉妹として、一卵性は同じ遺伝子をもつ者として）僕たちふたごにとって、趣味や考え方が似てくることは当然のことです。ですから、たとえば将来の進路を決めたり、人生における様々な決断において、二人が似通ったものを選択したとしても、それはそれで自然な流れだと思います。しかし、その逆に、ふたごであることが大好きで誇りに感じているふたごにとってさえも、相手と色々と比較されることが最も嫌なことの一つであることもまた事実です。ですから、そうした相手と比較されることを回避することが自然に身につけていることもあります。そして、そうした回避行動は意識的に行う場合もあれば、無意識に行う場合もあるでしょう。それは、それらの決断や行動の内容がどれだけ深刻・重要なものかにもよりますし、またそうした決断や行動を行うときの年齢にもよると思います。

ふたごというものはいつも同じことをしたがったり、あるいは逆に、いつも違うことをしたがったりするわけではありません。同じことをしたがるときもあれば、違うことをしたがるときもあるのです。しか

し、一般的には中学生くらいの時期から、なるべく相手とは違うことをしたいなあという思いが強まるようです。自分を相手と区別して、だんだんと自己というものを固めていくからです（自立とはその自己を確立することです）。たとえば、僕たちの例で言えば、相棒は中学に入ると野球部を選択し、僕はすぐ止めてしまいました。バスケットを選びました。また、高校での進路に関しては、相棒は理科系進学コースを選び、僕は文科系進学コースを選択しました。大学も結果として違う分野に進みました（現在は、お互いに人間と付き合っていく仕事をしています）。

もちろん、こうした重大な決定の時だけではありません。日々の小さな局面においても、ふたごは二人の有り方のバランスによって、同じ事をしたり、違うことをしたり、あるいは上手に役割分担をしたりするでしょう。これは相手が得意なことだから相手に任そうとか、これは自分がした方がよさそうだから自分でやろうとか、言わば棲み分けをするのです。もちろん、この棲み分けが常に機能するわけではありません。それぞれが越境行為をして、その棲み分け秩序のようなものが緊張する場合も生じます。なぜなら、場合によっては自分がそのことで損をしている、あるいは我慢していると感じる時や、相手のその分野が羨ましくなる時もあるからです。結局、ふたごの関係はそうした行きつ戻りつを繰り返しながら調和と緊張の連続の中で進んでいくわけです。そして、これこそがふたごという存在の複雑だけれども楽しい特徴、醍醐味なのではないでしょうか？

<文章を補うという「役割」を得て> 志村 真

志村恵の文章に何か付け加えるということでは思い巡らしていましたが、一つの事柄が浮かんできました。それは幼少時の記憶についてです。そしてそこから主題は、ふたごの社会的役割が及ぼす人格形成上の影響なるものへと俄然深刻に発展していきませんか？！

人によって迎える記憶には違いがあるでしょうが、ぼくの場合には、幼少時の記憶がほとんどありません。幼稚園の年長時代のものが少しあるくらいで、それより前の記憶のほとんどが「兄」である恵か両親による物語りによって形成された事後記憶なのです。ですから、家族で久しぶりに会って色々昔話をしていて、「こういうことがあったね」と誰かが言って、「そうだった、楽しかったね」と応じる者がいても、常に「えーっ、覚えてないよ」となる訳で、そしてその後再びその話題になったときには、前に「兄」などによって与えられた「記憶」を元に話しに参加するという具合なのです。

もちろん、記憶力に問題があるのかもしれませんが、ほぼ同時に生を受けたふたごがその最初期から「兄／姉」「弟／妹」と役割を当てられたことに理由があると睨んでいます。それぞれ子どもは発達に伴って様々な新しい課題に直面します。「初めてのお使い」や「初めてバスに乗る」などが思い浮かぶと思います。そのような局面では、特に、同性ふたごの場合はその傾向が強いのではないかと思います。ふたごはほとんど一緒に直面するのではないのでしょうか。そして、与えられた「役割」としての「兄／姉」が前に出て対応し、「弟／妹」は後ろから付いて行くことが多いのではないのでしょうか。年が離れていけば、弟／妹たちはいずれ自分で直面しなければならなくなるのですが、ふたごの場合は小学校を卒業するくらいまではずっと一緒なものですから、これでは弟・妹の社会性が広がるわけがありません。

そういう理由で、ぼくは引っ込み思案となり、大学生になっても一人で買い物に行くのが苦痛、常に人の意見に左右される性格となってしまいました。一方、恵は中学生の頃から一人旅をこなし、21歳にて半年間ヨーロッパを放浪旅行した冒険家なのです。ぼくと言えば、初めて飛行機に乗ったのは25歳、しかも機上で目まいを起こしたという具合なのです。そこからの苦闘については別の物語が用意されるでしょう。

<反則の付記>

強い野球部のレギュラーで、生徒会の役員をバリバリにこなし、女の子には常にもてていた人物の一体どこが「引っ込み思案」なのかわかりませんが、それぞれにはそれぞれの物語や思いがあるのが、「ふたごなんだなあ」と改めて確認した「弟」真の文章です。

『ツインズふらす』第2号（多胎育児サポートネットワーク）から転載・修正